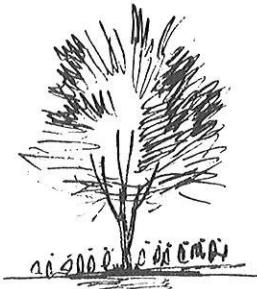


光の子



No.118 2006.3.25

●今年の聖句 神は言われる。「あなたを見放すことなく、見捨てることもない。」
(ヨシュア記1:5)



「風にのせて」

挿絵・中島英子

「春立ちぬ」

御降りに濡れたる櫻渡し継
櫻渡して初山河かがやかす

冬の虹消えたるあたり濡れてをり

忘れ物預かつてより風邪心地

可惜夜のわけても月の都鳥

花道に明かりが灯り春立ちぬ

降る雪に傘傾けて久女の忌

黛

まどか

(『ヘップバーン』主宰)

「子どものための子どもの施設建設とその運営を！」と、情熱だけで走り出した二十四年前がまるで昨日のことのように思えます。

「家族と暮らすことの出来ないかわいそうな子どもたち」のための施設と単純に言っていたのが光の子どもの家の始まりでした。

当然その背景には、子どもを施設に預けなければならぬ悲しい家族たちがいたのです。しかし今は、この国特に家族の困難で非人間的な問題の集積場と化しております。

光の子どもの家は、家族の構成員として生命を受けた子どもたちと、家族と一緒に関わりはたらい代わるということを意味します。子どもたちにとって家族に等しいと感じられるような関係をもつて暮らしを創り上げてきました。子どもたちのプライベートな生活がその内容ですから、当然「労働者性」だけで暮らしを創ることは出来ません。

毎年十一月か十二月になると、埼玉県北美術展というものが開かれる。第一回展は秩父市で開催され、熊谷市、行田市、本庄市、深谷市、羽生市、寄居町、吹上町などでそれぞれ何回か行われた。絵画、彫刻、工芸、写真、書道の五部門で一千点を超える入選作の展示である。

今回四十八回展は寄居町であった。この町は歴史的にも文化的にも大変奥行きの深い町で、観客も多く盛大であった。

展覧会の最終日、授賞式のことである。会場に入ったとき、正面に「第四八回県北美術展授賞式」という大きな看板が掲げられているのが目にに入った。大きく素晴らしい文字だ。最近はワープロ文字が拡大され整然としたものをよく見かけるが、それに比べてこの会場の文字は何と素晴らしいことか。たっぷりと墨を含んだ太い筆、勢いよく走るかすれ文字など、一見して引きつけられてしまった。「うわーすごい字だな」と思った。後で考えてみると、これがまずかったのであるが。

授賞式も型通り行われ、みんな二

おかげさまで二十一回目の年度が終わろうとしております。これまで九十名に上る子どもたちがここで暮らしてきました。

「子どものための子どもの施設建設とその運営を！」と、情熱だけで走り出した二十四年前がまるで昨日のことのように思えます。

「家族と暮らすことの出来ないかわいそうな子どもたち」のための施設と単純に言っていたのが光の子どもの家の始まりでした。

当然その背景には、子どもを施設に預けなければならぬ悲しい家族たちがいたのです。しかし今は、この国特に家族の困難で非人間的な問題の集積場と化しております。

光の子どもの家は、家族の構成員として生命を受けた子どもたちと、家族と一緒に関わりはたらい代わるということを意味します。子どもたちにとって家族に等しいと感じられるような関係をもつて暮らしを創り上げてきました。子どもたちのプライベートな生活がその内容ですから、当然「労働者性」だけで暮らしを創ることは出来ません。

私は、この素晴らしい書をもらつて嬉しくてしかたなかつた。家へ帰ると、絵を描く友達が来た。私は早く速この書を部屋に広げた。

「すごいでしょ。良い字だね、これをね、もらって来ちやんですよ。どこかの事務所の棚の上か何かに置かれ、いざれ处分されそうな気がして、無理矢理もらつてきちゃつたんですよ。すごい字だね、ね。」私は嬉しさのあまり友達に同意を求めて念を押していた。「うーん、すごいですね。大家の書じやあ買つたら大変だね。」友達のこの言葉によつて有頂天になつていた私の心は、一気に冷静にもどされた。そう、買った大変だ。そんな大変なものを奪ひたくないか、まるでダッ子がお菓子をねだるようなものではないか。

恐らくあの書はK先生の手によつて一気に書かれたものであろう。そもそも言わずにこにこして立つておられた。私はK先生の文字だから感動したのではない。一目見てすっかり集中力によって生み出されたものではある。しかもこの一枚の文字の裏

私のあるプライベートな部分が子どもたちと共有された上で、子どもたちのプライベートの全てをまかなくていくことが可能になります。

幸いなことに、ご家族から溢れるような愛情を受けて育つた熱情なかで、開設当初の地域からの大反対運動、共にはたらいてきた信頼すべき職員から、そして出会えたことを心から喜んだ仲間から、大きな衝撃的な排撃を受けたことがあります。曰く、「あなたはこんな仕事をする資格がありません。」
「すぐにも退職しなさい。etc.」

そんな時はかなり感情を逆撫でされて反撃したくなりましたが、しかし、ここを利用している子どもたちやその家族たちは、生まれ以来まさに排撃され、卑しみられ、疎んじられていました。群衆でありました。そのことに思いを致すとき、ああ、彼らはこんなことが日常だつたんだ！、と思い返してきました。それは、時流に乗り、大向こうからの喝采や評価など、

たま先生の文字だつたという訳である。

私は、この素晴らしい書をもらつて嬉しくてしかたなかつた。家へ帰ると、絵を描く友達が来た。私は早く速この書を部屋に広げた。

「すごいでしょ。良い字だね、これをね、もらって来ちやんですよ。どこかの事務所の棚の上か何かに置かれ、いざれ处分されそうな気がして、無理矢理もらつてきちゃつたんですよ。すごい字だね、ね。」私は嬉しさのあまり友達に同意を求めて念を押していた。「うーん、すごいですね。大家の書じやあ買つたら大変だね。」友達のこの言葉によつて有頂天になつていた私の心は、一気に冷静にもどされた。そう、買った大変だ。そんな大変なものを奪ひたくないか、まるでダッ子がお菓子をねだるようなものではないか。

恐らくあの書はK先生の手によつて一気に書かれたものであろう。そもそも言わずにこにこして立つておられた。私はK先生の文字だから感動したのではない。一目見てすっかり集中力によって生み出されたものではある。しかもこの一枚の文字の裏

このはたらきのなかではつとに大きな誘惑を避けるを得ることを得ることであります。これが出来る時でもありました。私は

だらだらしてきました。

私はK先生はK先生にお会いする機会があつた。そこでお詫びとお礼を申上げたのだが、K先生はやはり「良いですよ」と言って下さった。

K先生と直接お会いした上で、私の心は一応これでおさまつた。

その後私はK先生にお会いする機会があつた。そこでお詫びとお礼を申上げたのだが、K先生はやはり「良いですよ」と言って下さった。

K先生と直接お会いした上で、私の心は一応これでおさまつた。

しかし、やつぱり後悔は消えない。申し訳ない事をしてしまつた。これはお返しするべきである。

じつくりと私の心の中に、あの文字の素晴らしさを味わい納めて、いつか機会をみて、やつぱりお返ししなければならないと思つてゐる。

ひかりのこ

No.118

学者もどきのつぶやき ⑰

短気は損氣？

山形大学
学長 仙道 富士郎

学者もどきのつぶやき ⑰

短気は損氣？

頭に血がのぼった私は、十五分の休憩時間にM氏をつかまえて、「あなたは山形の草木塔のことを見つけていたるか」と聞いただし、「否」の解答を得ると、「草木塔も知らずに山形がどうのこうのと言うな」と怒鳴った。草木塔とは草や木の命をもいとおしんで路傍に立てられている塔で、現在一〇〇基近くが残っているが、そのほとんどは山形県の置賜地方にあり、山形の人々の心の現れの一つなのである。

ところで、ごく最近のことになると、M氏による講演会の開催通知が来た。この頃、前の事務局長にあたる大学の総務担当理事が先導して大学経営に関する講演会をシリーズで開催しているので、その一つだと思い、出席しない旨をその理事に言った。ところが講演会の直前になつて、係の人が私に講演会の挨拶の依頼に来た。件の理事に欠席の旨を伝えてあること

のか。しかし、大学主催の講演会に学長が大学に居るのに挨拶をしないわけにもいくまい。

とまどいは、M氏の側にもあつたらしいことが後で分かつた。出迎えの車が大学の正門に入る直前、M氏は「学長は講演会には出席しないですよね」と確認したところ、出迎えの係の人は「当然のことのように私の出席を伝え、「これから学長室に行つて懇談してもらう」旨を伝えた。M氏は絶句したまま学長室に連れて来られた。場慣れしているはずのM氏の額にうつすらと汗がにじんでいるのを私は見逃さなかつた。私の方がM氏よりも図太いのかもしれない。

さて、学長職五年目にもなると、もみにもまれた結果として、私も大分大人になつたらしい。講演会の挨拶で私は彼との出会いを面白、おかしく紹介し、皆の笑いを誘つた。M氏もそれを受ける形で話の

全く記憶していない。ところが、今回心静かにM氏の話を聞いてみると、法人化された大学を運営しなければならなくなつた今時の学長にとって、何とも刺激的な、迫力のある話なのである。彼は米国に二〇年近く滞在し、帰国してからはある私立大学の教務担当副学長を務めた経験を持つており、大學のミッションについて一家言を持つていて人なのである。今回の講演では、興奮したまま一〇〇分近い講演を聞き終えた私は、最後の挨拶で、「頭に血がのぼつていたので、前回のM氏の話の内容を全く憶えていないのは残念至極である。やはり短気は損氣のようである。」と言つた。私はようやくタイトルにたどりついた。「短気は損氣?」講演会の後の懇親会はいたく盛り上がり、私にとつてM氏は忘れられぬ一人になつてしまつた。これでこの話はおしまい。

続・トムソーヤ達の朝

日本キリスト教団東大宮教会 永野 三恵

恵の時である。そして、主の復活を祝うイースターと共に、本格的に春が訪れる。

先日、”日本”の高校生、意欲足りぬ“との新聞記事が目にとまつた。『享樂的、人並み意識が強く、意欲が少ない——こんな日本の高校生像が浮かび上がった』(朝日新聞二〇〇一)いうものだつた。公立中学校の相も、この十年程は変わってきた。表情の乏し

まっている。自分の興味以外の他の世界を理解しようとする想像力やコミュニケーションが確かに欠けてきている：

私はこうした子ども達が育つてきた背景に、ことばの力を養う幼少期の経験が貧しすぎるのではと思っていた。その確信は、私が主宰していた『あすなろ文庫』を通しても得たものだつた。

我が家は二五年程前、都内から埼玉県下の田園風景が広がる蓮田市に引っ越してきた。子育て中の我が家では、子ども達の生活の中にもいつも絵本・本があつた。しかし、当時の蓮田市の図書館は余りにも貧弱であり、その文化度の差に愕然とした。

このまま行政を当てにしていたのでは娘たちの成長に間に合わないと、私は近所の母親達と協力し私設文庫を開いた。いろいろな才能や個性を持つたお母さん達の集

私は子ども達に絵本や本を手渡すだけでなく、さまざまな企画をした。クリスマスイベントとして人形劇団を招いたり、講演会を開催した。

早春の柔らかな光に包まれる頃、教会の暦ではレント（受難節）を迎える。主イエス・キリストが十字架への道を歩まれるこの時期、教会の枝に連なる私たちは、自分

い、もの静かな子ども達、アニメや偏った分野の漫画に夢中になり自分の小さな世界だけを大切にしている子どもが増えている。携帯電話やインターネットの普及に伴い、既に、10代の子供たち、

団はみごとな力を發揮した。公民館の小さな部屋は『あすなろ文庫』として、幼児や小学生に開放された。子ども達は絵本の読み聞かせや、おばさん達の口から紡ぎ出さ

り、ことばは見えないものを見えるようにしてくれるのだ…と。

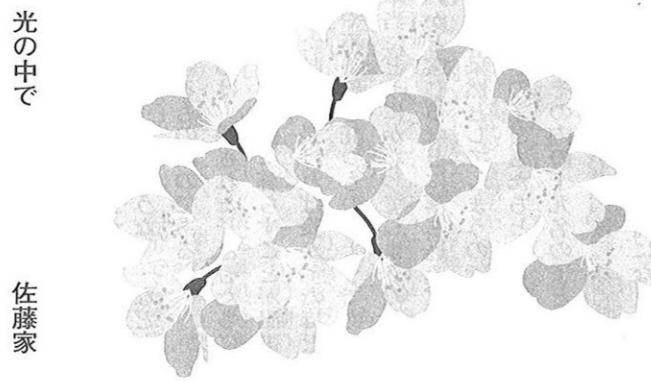
ハハハ」と皆の笑い声。せっかく始めたしりとりも静一君の言葉で終了。きっとその場にいないと伝わらないと思いますが、とにかく笑いの絶えない食事が毎日繰り広げられています。

小一の美也子ちゃんは日中全エネルギーを使うから夕食時にはいつもボーッとしてます。ある日、ご飯を食べようとしてもうまく口に運べずボトボト落とし、味噌汁もこぼすということがありました。私はつい「みやこ」と声を大きくしてしまったのですが、穴水さんが「だいじ・だいじ」(大丈夫・大丈夫)とその場をフォローしてくれ、こぼしたものは拭けばよいということを皆に伝えてくれました。

文章にすると、とても小さな事なのですが、毎日一緒に食事をとつている時の小さな出来事がきっと、それぞれの心をあたたかくしているのではないかと最近つくづく思います。

笑いすぎて疲れてしまう時もありますが、毎日楽しい食卓を囲めることに感謝しつつ、これからも子ども達、そしておとなも笑顔でいられるような毎日が続きますように心から願っています。

市川 美穂



佐藤家

三、四年生は鬼に、「先生に誉められたから良い子だよ!」と言つたり、恐くない!と豆を投げつけていました。大人と中高生は笑顔で見守りとても楽しい! 驚がしい節分でした。

後日、施設長から節分について話しがありました。節分は鬼が子どもを泣かすのではなく、子どもが鬼を退治し、子どもが小さな英雄になる日ということでした。子どもの泣き顔を楽しんでいた自分を少し反省してしまいました。同時に、小学四年生の誇らしげな表情を思い出しました。去年は大泣きしていたようだけれど、今年は泣かなかつた彼の姿を嬉しく思つたからです。来年度も子どもたちの成長と共に各行事を楽しんでいきたいです。

田口 貴子

河のほとりで

倉澤家

二〇〇六年になり、早くも二月が終わりました。皆さんいかがお過ごしでしょうか。

二月と言えば節分がありました。一月の後半から食卓では、光の子ども家にはとても恐い鬼が来て、子どもを泣かせて帰ると言うことがよく話題に出ました。去年の鬼は土の入った鉢を落として掃除していくたとも言つていました。私は内心子どもたちの泣き顔を見るのがとても楽しみだと思つていました。

当日は、小学一年生は号泣、小学

え切れていな日常を振り返らずにはいられない出来事でした。

思いを新たにして、来年度を迎えると願います。

池田 裕子

子どもたちの季節 仙道家

え切れていな日常を振り返らずにはいられない出来事でした。

思いを新たにして、来年度を迎えると願います。

菅原施設長

日々春らしくなっていくこの頃です。

ある日の朝、菅原施設長が仙道家にやつきました。ダイニングに入りました。

「ここは誰だ?」

と、空いている席を指しました。

それは、高一の香奈と中一の龍治の席でした。

菅原施設長は、早速彼らを呼びに行きました。

不機嫌な顔で来る香奈と龍治。年上の子たちがしつかり起きていないことでガツンと叱られた二人に、菅原施設長がわざわざこのことのため

に朝、来てくれたことと、朝食は一緒に食べよう、と話しました。

光の子どもの家では、食事をとてお腹だけでも大切に考えています。お腹だけでも大切な機会になつたのではな

いでしょうか。結婚したお二人も子ども達の表情もとてもキラキラしていました。

きれいなもの、厳肅なものを見て感動するステキな機会になつたのではな

いでしょうか。結婚したお二人も子ども達の表情もとてもキラキラしていました。

菅原施設長は、早速彼らを呼びに行きました。

不機嫌な顔で来る香奈と龍治。年上の子たちがしつかり起きていないことでガツンと叱られた二人に、菅原施設長がわざわざこのことのため

に朝、来てくれたことと、朝食は一緒に食べよう、と話しました。

光の子どもの家では、食事をとてお腹だけでも大切に考えています。お腹だけでも大切な機会になつたのではな

いでしょうか。結婚したお二人も子ども達の表情もとてもキラキラしていました。

きれいなもの、厳肅なものを見て感動するステキな機会になつたのではな

いでしょうか。結婚したお二人も子ども達の表情もとてもキラキラしていました。

菅原施設長は、早速彼らを呼びに行きました。

不機嫌な顔で来る香奈と龍治。年上の子たちがしつかり起きていないことでガツンと叱られた二人に、菅原施設長がわざわざこのことのため

に朝、来てくれたことと、朝食は一緒に食べよう、と話しました。

光の子どもの家では、食事をとてお腹だけでも大切に考えています。お腹だけでも大切な機会になつたのではな

いでしょうか。結婚したお二人も子ども達の表情もとてもキラキラしていました。

菅原施設長は、早速彼らを呼びに行きました。

不機嫌な顔で来る香奈

家族に関わる その11

菅原 哲男

ろう。

子ども人口の二十%余りが子どもや少年が亡くなるという現状は異常としか言い難い。再統合や再生などを口にする以前の問題である。

そのことを考えると、児童養護施設を利用する子どもやその家族が営んできた人生は、相当過酷なものであった。子どもたちが児童養護施設を利用していくことのほうが分かってくるのである。

この国の子ども人口の約〇・二%の子どもたちが児童養護施設を利用している。その〇・二%は、経済的、社会的にも文化的などどのような切り口から検討したとしても、決して胸を張ることが出来るような階級が新しいグループに属するものではないのである。相当生

き難いこの世の生活であつただろうと推し量ることに何の抵抗も感じない。

そのような家族と家族のような関係になることを覚悟することが、児童養護施設に子どもの人所を受け入れるときには必ずしも必要の条件なのである。

専門職としてとか、この世に受け入れられるとか、評価されるとかがこのはたらきに関わる要件であつてはならないと心から思うのである。

わたし、この私自身の家族が児童養護施設を利用しているのだという具体的なイメージがなければ、子どもはもちろん家族と関わるときに、すれ違いや

無反応などを感得することになる。彼の位相が交わり短縮されることが多いのである。

制度や政策は人間関係を直接創成することは出来ないと考えるのはそれが一つの原点なのである。まさにそのよだれをばねばならない私的生活など誤るのである。計画的な人間関係などあるはずがない。だから評価してからどうするのかを思索し試行錯誤するためにはなければならない。

制度や政策は、私的な市民生活を持つべき難いこの世の生活であつただろうと願うものである。

もし現在の児童養護施設における養育の貧しさは、関わる私自身の故であると省みず、制度や政策が貧しいからだと言うならば、最早子どもたちの私的生活に関わる土台を喪っていることなのだろうと考える。

それにして、かつて関わった子どもたちが大人になって、首をくぐり農業をあおつて自死したり、餓死したりと言うならば、最早子どもたちの私的生活に関わる土台を喪っていることなのだろうと考える。

いう報に接するとき、この国で貧しい弱い人々が生きることの困難さや不条理をしみじみと思うのである。

児童養護施設において家族に関わるということは、その家族の一員として生まれ出でた子どもを、理由の如何によらず預かって育てるということだから、その子どもの家族のようになるとということであり、またその子どもの家族と家族のようなるとを意味するのである。

ところで、これまで子どもの家族の逝去にかなりの頻度で関わってきた。また子どもの死にも家族より頻度は少ないが関わった。そして、親たちの死は子どもたちにかなりの衝撃をもたらすことを経験してきた。

光の子どもの家創立以来、十九名の子どもたちに関わる十三名の親たちが死去した。

この十三名の親たちは若くして亡くなっている。全てが五十歳前なのである。なぜだと声を上げたくなるような突然の悲惨な死なのである。

その親たちと家族のようにあるいは家族を超えたつき合いをさせてもらってきた。だから、葬儀を営むこともしてきたし、葬儀に参列することも始めてきた。

そしてそのたびに家族を喪ったよう

な激しい悲しみや喪失感、虚脱感を味わってきたのである。

それが虐待であれば貧しさであつたとしても、親たちが自らその生に関与しきることとは、悲惨なことであり、できれば避けたかったことだつただろう、親たちの死に出会い、その別れの儀式を執り行い、あるいは参列して対峙したときに、心からしみじみ感じるのである。これは、ことば以前に湧き出でている感覚や情緒なのである。それからやや時間をおいて、悲しかつた悔しかつただろうななどと言語化されるものなのである。

とりわけ、残された子どもたちにしてみれば、一緒に暮らすことが出来なかつた時間が長ければ長かつたほど無念や不条理を託つものようである。

本当にどうにかなつてしまふのではなくいかと案じるほどに落ち込み、悲しみ、そして呆然してしまうのである。

九十名の子どもたちとここで関わってきた。その内の十九名の子どもたち（三名の子どもが成人後程なく）の十一名の親たちが五十歳前になくなっていることは率にしたらかなりのものだ

現場から 続・光の子らしく

(21)

岩崎 まり子

「みんなさい」をしなければならない

私は

「みんなさい」をしなければならないのは、目の前

です。

前

の子どもにだけではありません。

私は、これまで二〇人弱の子どもを担当してきました（恐れ多くも…）。

どの子どもに対しても、やはり申し訳ない思いを抱え続けているのです。

全く連絡を寄せられない子どもに対し

ては、尚更です。

珠弥は中三の秋に家出し、暴走族の仲間として警察のご厄介になつた

子どもです。そして、ここだけな

く、実母、元担当者と様々な大人が

関わりましたがどうすることも出来

ず、結局少年院に行き着いてしまつたのでした。

彼女からは、その後、面会のお札

の手紙が来ただけでしたので、もう

出ているはずですが全く行方知れずでした。私には、彼女がまとも

な社会生活をしている姿は全く想像できず、毎日祈るような思いで新聞を開き、細かい記事まで目を通しました。「…でひつたり…」「…で恐喝…」—もう未成年ではないので、何かしたらフルネームで載るはず：と、名前が載つていなことを確認

すると肩から力が抜けています。何年経つても、毎朝新聞を開くとき、緊張してしまいます。彼女のことは、いえ、彼女への私の関わりは、私の中ではまだ抜けない大きな棘です。

そんな思いが通じたのか、つい先日、その珠弥から電話がありました。

元気そうな声だったそうです。人に

は言えないような生活をしていました。けれど、足を洗い、保育士になるため勉強をするそうです。ちゃんと

たら会いに来ると言っていたそう

です。「良かつたな。」—菅原施設長にそう言われ、私はまた肩から力が抜けいくのを感じました。

何の涙なのか、鼻の奥がツンとしましたが、泣くのは早いとすぐ思いました。

私は私の棘を抱き続けることで、

子どもたちは夢を抱き続けることで、今より少しでも上を向いて歩いて行くことが出来るのかもしれません。

新しく何かが始まる一春は、すぐそこまで来ています。



無反応などを感得することになる。彼の位相が交わり短縮されることが多いのである。

制度や政策は人間関係を直接創成することは出来ないと考えるのはそれが一つの原点なのである。まさにそのよだれをばねばならない私的生活など誤るのである。計画的な人間関係などあるはずがない。だから評価してからどうするのかを思索し試行錯誤するためにはなければならない。

制度や政策は、私的な市民生活を持つべき難いこの世の生活であつただろうと願うものである。

もし現在の児童養護施設における養育の貧しさは、関わる私自身の故であると省みず、制度や政策が貧しいからだと言うならば、最早子どもたちの私的生活に関わる土台を喪っていることなのだろうと考える。

それにして、かつて関わった子どもたちが大人になって、首をくぐり農業をあおつて自死したり、餓死したりする報に接するとき、この国で貧しい弱い人々が生きることの困難さや不条理をしみじみと思うのである。

珠弥は中三の秋に家出し、暴走族の仲間として警察のご厄介になつた子どもです。そして、ここだけなく、実母、元担当者と様々な大人が関わりましたがどうすることも出来ず、結局少年院に行き着いてしまつたのでした。

彼女からは、その後、面会のお札の手紙が来ただけでしたので、もう出ているはずですが全く行方知れずでした。私には、彼女がまとも

な社会生活をしている姿は全く想像できず、毎日祈るような思いで新聞を開き、細かい記事まで目を通しました。「…でひつたり…」「…で恐喝…」—もう未成年ではないので、何かしたらフルネームで載るはず：と、名前が載つていなことを確認すると肩から力が抜けています。何年経つても、毎朝新聞を開くとき、緊張してしまいます。彼女のことは、いえ、彼女への私の関わりは、私の中ではまだ抜けない大きな棘です。

そんな思いが通じたのか、つい先日、その珠弥から電話がありました。

元気そうな声だったそうです。人に

は言えないような生活をしていました。けれど、足を洗い、保育士になるため勉強をするそうです。ちゃんと

たら会いに来ると言っていたそう

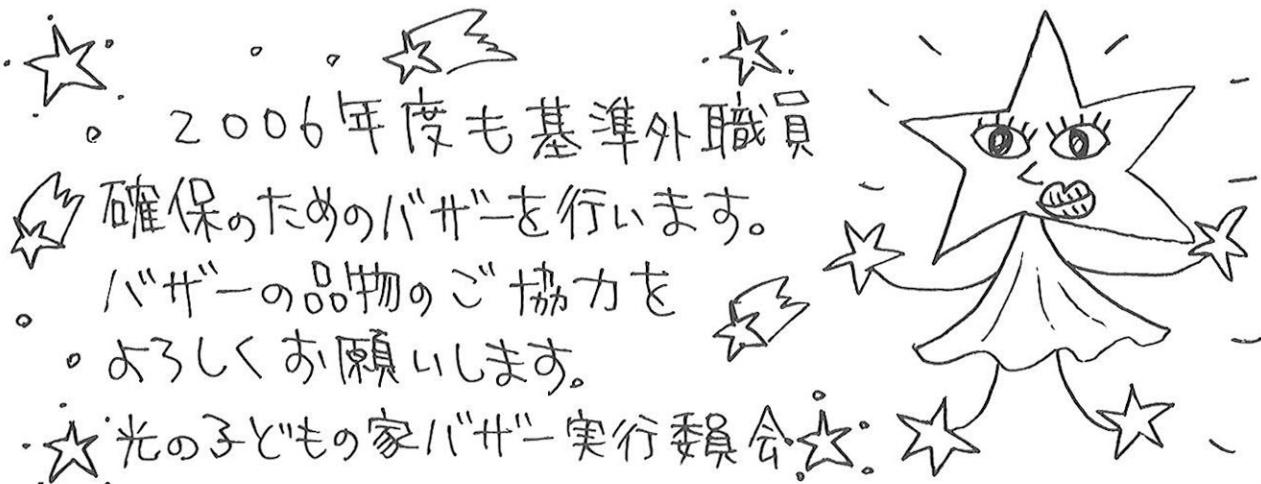
です。「良かつたな。」—菅原施設長にそう言われ、私はまた肩から力が抜けいくのを感じました。

何の涙なのか、鼻の奥がツンとしましたが、泣くのは早いとすぐ思いました。

私は私の棘を抱き続けることで、

子どもたちは夢を抱き続けることで、今より少しでも上を向いて歩いて行くことが出来るのかもしれません。

新しく何かが始まる一春は、すぐそこまで来ています。



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 10月1日▶2005年12月末日

2005年 10月

幼児 5名 小学生 15名 中学生 7名 高校生 9名 措置外 6名

計 42名

1日 大利根藤幼稚園運動会

12日 赤十字奉仕団、後援会除草奉仕 感謝

高三友那就職内定

13日 熊谷児童相談所訪問調査

<10月の物品ご寄贈者>

穴沢勝 コヤナギスポーツ 松本明子 小柳千晶 谷本清光

島田 遠藤千代子 他多数の各位様

11月

2日 卒園生加津子入院～9日手術

3日 第78回理事会 第21回感謝の集い

10日 園内研修村瀬先生來訪講義

12日 後援会主催薔薇会

17日 田村様散髪奉仕 感謝

○ 岩崎保育士、卒園生加津子のお見舞い大阪へ

27日 第一アドヴェント

<11月の物品ご寄贈者>

池端 栗原和子 東松山わかつき園 羽鳥唱平 関根和子

澤村幸男 若山良子 横村登美江 春山のり子 松本明子

斉藤布団店 三宅ちとせ 女子学院宗教委員会 真田泉

鳥海宏子 他多数の各位様

12月

3日 大利根藤幼稚園表現発表会

4日 第2アドヴェント

8日 原道小学校との連絡会

10日 銀座ベンチャークラブ來訪

Vリーグバレー NEC VS 武富士 招待 感謝

11日 第3アドヴェント

18日 第4アドヴェント

24日 クリスマスイヴ夕食会 キャンドルサービス

25日 クリスマス祝会 ページェント

27日 入所事前面接

28日 餅つき 小6女子武田有実入所岩崎保育士担当

<12月の物品ご寄贈者>

梅沢義一 木暮伸二 大橋清栄 萩原多喜子 松本明子 三

国コカ・コーラボトリング(株) 須藤喜代春 東京三菱銀行 藤

塚小学校PTA 藤田陽子 (株)プレナス 落合美佐子 渡辺

横村澄子 ガールスカウト日本連盟 坪井のりみち 清勝 江

森百合子 小谷野 北川辺郵便局 柴田 塚田 エンターテ

イメント 中島陸雄 荒井 根岸 森公子 青木 毎日新聞東

京社会事業団 (株)ジンアンドマリー (株)ステラ 岡本 小川久

子 新村義一 東地区婦人会 石井 落合 義本太一 小早

川典子 大村真理 根岸弓貴子 他多数の各位様

感謝してご報告致します。(くら)

||||| ————— 反 射 光 ————— ||||

☆春めいてきたと思っていたら春の雪
と気候の激しい変化に追いつきません
☆それでも、卒業、出発、入進学の
備えなどを応援するかのように、梅が
真白に辛夷が開きかけています☆二
回目の年度も終わりを告げ、新年度へ
の備えに忙殺されるなかで、もう一つ、
代替わりが具体的に進められています
☆新陳代謝がうまくいかないと生物は
死滅します☆出会いと別れもまた私た
ちの思いを超えて自然ななかで行われ
ます☆本紙は本来ならば一二〇号を超
えて発行されなければならなかつたの
ですが、約二年分ほどが抜けています
☆しかししながら多くの方々のご協力に
よって紙面を飾つていただき、ご支援
下さった方々へのご報告をメインに編
集・発行することが出来ました☆深謝
いたします☆されどもこの国の子ども
たちの状況は深刻化の一途です☆竹花
信恵を編集長に新たな紙面作りにいそ
しんで参ります☆本紙発行が子どもたち
の利益に還元されることを願つて☆
乞う、更なるご支援ご鞭撻を！ (哲)